

## 慢性疾患によりがんのリスク上昇

がんと、そのほかの慢性疾患には、加齢や不健康な生活習慣など共通の危険因子がある。本研究では、慢性疾患のマーカーとがんの発症および死亡のリスクとの関連について検討した。また、運動により、慢性疾患と関連するがんのリスクがその程度低減するののかについても検討した。

台湾において、標準的な健診を受けた 18 歳以上の、がんの既往がない 405,878 例を対象に前向きコホート研究を実施し、その後 1 年以上追跡した。健診では、慢性疾患のマーカー 8 種（心臓血管病 2 種、糖尿病、慢性腎臓病 2 種、肺疾患、痛風関節炎）を測定した。平均 8.7 年追跡した結果、血圧と肺疾患以外のマーカーで、がん発症のリスク上昇と有意な関連がみられた（補正後ハザード比の範囲：1.07～1.44）。がん死リスクについては、8 種すべてのマーカーでリスク増大と有意な相関がみられた（同：1.12～1.70）。また、慢性疾患リスクスコアは、用量反応性にがんの発症率および死亡率と正の相関を示し、スコア最低位群と比べ、最高位群のがん発症率は 2.21 倍、がん死亡率は 4.00 倍であった。8 種のマーカーによるがん発症または死亡の人口寄与割合は、5 つの主要生活習慣因子（喫煙、運動不足、肥満、飲酒、野菜や果物の摂取不足）の複合によるものとほぼ同等であった（がん発症 20.5%対 24.8%、がん死 38.9%対 39.7%）。また、運動は慢性疾患によるがん発症リスクを 48%、がん死リスクを 27%低減した。

したがって、慢性疾患はがんのリスクとしては見過ごされやすいが、心臓血管病や糖尿病、慢性腎臓病などを合わせたがんへの影響は、5 つの主要生活習慣因子と同等であることが示唆された。今回の結果では、慢性疾患はがんの発症リスクの 5 分の 1 以上、がん死リスクの 3 分の 1 以上に寄与することが示された。また、運動は慢性疾患によるがんのリスクを 40%近くも低減することも明らかとなった。

出典：British Medical Journal (Clinical research ed.). 2018 Jan 31; 360: k134.